
桜の季節に

夕菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の季節に

【Nコード】

N4431R

【作者名】

夕菜

【あらすじ】

出会いを知らない女の子の物語。

春は、出会いと別れの季節だと聞いたことがある。

私は木の幹に背中を預け、空を仰ぐ。空からは、ひらりひらりと花びらが舞い落ちてきた。

それは・・・桜の花びらだ。いや、正確に言えば、これは私自身。・・・私は、この桜の木と共に生きる者。だから、この花びらがすべて散ったとき、私は消える。何も残さずに、すべてを忘れて、消えてしまう。

だから、私にとって、春、という季節は別れの季節。出会いなんてないし、望んでもいない。だって、出会いがあってもすぐに別れがくる。ただ、哀しいだけ。

私の桜の木があるのは、小川のふち。他に、桜の木はなく、私の木だけが「ここにいるよ」と主張しているように、春という季節がくると、溢れんばかりの花を咲かす。

それは、どこの桜の木よりも美しいらしく、私の近くには人がたくさん集まる。

そんなある日。

私はいつものように、桜の木に背中を預け、私の近くに集まった人々のことをぼーっと眺めていた。

（楽しそうだな。この人たち・・・）

人々は、人ではない、私の存在に気付くはずもなく、それぞれお弁当やお菓子を囲んで楽しそうに過ごしている。家族や友人、恋人同時……。きっと、みんなそんな関係だ。だから、あんなに楽しそうなんだ。

「ねえ。何してるの？」

「！」

不意に声をかけられた。

振り返ると、そこには黒髪の少年が一人。

「・・・君、一人なの？友だちとか一緒じゃないの？」

少年は、休む暇なくまた私に問いかける。

「うん。私は一人」

（この子、私のことが見えるんだ！）

私は、そんなことを思いながらも、それを感じさせないように落ち着いた声で言った。

今まで、人に声を掛けられたことなんてない。だから、嬉しかった。でも、私が人じゃない、とばれてしまったら、きっとこの子は離れていく。

だから、普通の人のふりをした。

「親たちは、僕の知らない話で盛り上がってるし、僕、暇なんだよねえ。一緒に遊ぼうよ」

「・・・うん！私も丁度、退屈してたところだったの」

私が伏せ目がちにそう言うと、少年はニコリと微笑んだ。

「んじゃ、何して遊ぼうか？」

私は、気付いていなかった。彼と出会ってしまったことに。出会いの次に必ず訪れる“あのことは”知っていたはずなのに。

何で、気付かなかったんだろう。何で忘れていたのだろう。

・・・ああ。そうか。私は誰かと出会ったことがないから、本当の別れを知らなかった。ただ、それだけだったんだ。

私たちは、その日、日が暮れて、周りの人々が家に帰って行くまで遊んだ。

小川に泳ぐ魚を見つけたり、地面にらくがきしたり・・・。それらは、私にとって空っぽの心が一杯になるほど、楽しい遊びだった。きっとそれは、少年が楽しそうに笑っていたからだと思う。だから、私も心の底から楽しいと思うことができた。

次の日も、また次の日も、少年は私のところまで来てくれた。

ここを、待ち合わせ場所に決めて、決まったように毎日、この桜の木の周辺で遊んでいた。

（・・・なんで、他の場所に行こうって言わないんだろう？）

私は、それだけが疑問だった。だって毎日同じ場所で遊んでいたら、退屈しちゃうでしょ。

でも、私は、この桜の木と一緒に生きる者。だから、ここを離れることはできない。だから、違う場所に行って遊ぼう！と言われたとき、何て答えるか考えていた。

彼を傷つけないように、断るにはどうしたらいいんだろうって・・・。

でも、彼はそんなこと、気にする素振りも見せなかった。

・・・そして。雨が降った。

その雨は、夜中になるにつれ激しくなり、私の頬に打ちつける雨も強く、痛く、なってきた。

「そうか・・・」

私は、もう消えるんだ。そして、すべてを忘れてしまうんだ。

桜の花びらは、この雨のせいで、地面に落ち鮮やかさを失った。

春が終わりを告げる頃の大雨。どうやら、桜の花たちはもう限界だったらしい。

私は、気付いていなかった。彼と出会ってしまったことに。出会いの次に必ず訪れる“あのこと”は、知っていたはずなのに。

何で、気付かなかったんだろう。何で忘れていたのだろう。

・・・ああ。そうか。私は誰かと出会ったことがないから、本当の別れを知らなかった。ただ、それだけだったんだ。

私は、いつもそうしているように木の幹に背中を預けて、空を仰いだ。

空は、もちろん灰色で。他に何もなかった。だから、泣いていて

もなんの問題もない。

（・・・なんで、人となんか出会っちゃたんだろう）

ものすごく後悔した。

あの少年と出会っていなければ、出会っていても相手にしなければ、こんなにも哀しくて、辛くて、悔しい思いをすることなんてなかったのに。

「はぁ・・・」

溜息をだしても、この胸の奥にある重い鉛はなくならなかった。

私はそつと目を閉じる。

・・・もうすぐで、全てが終わって消えるんだ。

その時、雨の音に混じって、人の足音が聞こえてきた。

私はそつと目を開ける。

そこには、傘をさしたあの少年の姿があった。

「・・・来てくれたんだ」

私の声は、雨の音にかき消されそうだった。

来てくれた、でも、もうすべてが終わる。

「また、来年、ハルノに会いに行くから」

少年は、唇をギュツと閉じて、私のことを見据えた。

「え・・・？」

「去年、名前教えてくれただろ。それに、ハルノが人じゃないってことも」

「っ・・・そう・・・だったんだ・・・！」

私は、桜がすべて散るのと同時に消える、そして、すべてを忘れる。

少年は、私のことを見据えたまま、哀しそうに微笑んだ。

彼は、去年、私が人じゃないってことも、桜が散ってしまうと消えるってことも知ったんだ。私と彼は、去年、出会っていた。

ただ、私がすべてを忘れていただけ。

「私、あなたの名前、忘れちゃった・・・」

大切なことだったのに。私だけ、が忘れていた。

私が目を伏せると、彼は私の手を引いた。そして、木の後ろに回り込み「大丈夫」と言っ、木の幹を指さした。

「！・・・」

そのこの幹には不器用な文字で「シヨウ」と彫られていた。

「シヨウ・・・。これがあなたの名前なの？・・・これ、私が彫ったの？」

「そう。去年、忘れないようにってハルノが彫ってた」

彼 シヨウは、ニツコリと笑った。

私は、その文字にそつと手を触れる。

そして、確かに知ることができた。去年も、私は、ここでシヨウと出会っていた。

きつとそれは、今年もそうだったように、楽しくて、大切な時間だったんだ。

「・・・」

私は思った。

そうか。すべてが消えて無くなったわけじゃない。

シヨウは確かに私のことを覚えてくれていた。シヨウが、ここにいて、私が笑顔の時間を過ごすことができたのも、去年の時間があつたからなんだ。

・・・そのとき、最後の桜の花びらがヒラリと舞い落ちた。

「また、会いに行くから！」

「・・・ありがとう。シヨウ」

私は、ポロリと涙をこぼして笑った。

出会わなければよかった・・・そんなの間違っていた。こんな暖かな気持ちでいられるのも、この出会いのお陰なんだね。

今度はちゃんと覚えていきますように。私は、今までにないくらい強く強く願った。願うことができた。

少女からこぼれた涙は、一枚の桜の花びらに変わる。それと同時に、突然やってきたやわらかな風に、少女の姿はかき消された。

・・・その花びらは差し出された少年の掌にフワリと舞い落ちる。

そして、今年の春は終わった。

・ ・ ・ ・ ・ また来年に花を咲かせるために。

e n d .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4431r/>

桜の季節に

2011年3月7日17時40分発行